

VIII-2

多発性骨髓腫症例における自家末梢血幹細胞移植後の水痘・帯状疱疹ウイルス感染症

平井理泉、奥田慎也、寺迫桐子、川畑公人、竹之内礼子、谷村 聡、田中 勝、
萩原将太郎、三輪哲義
国立国際医療センター血液内科

[目的] 水痘・帯状疱疹ウイルス (VZV) 感染症は、造血器腫瘍に対する移植治療の際に罹患頻度の高い感染症のひとつであり、アシクロビル (ACV) 内服による予防の有効性は高いが、休薬後の発症も報告されている。多発性骨髓腫 (MM) は液性免疫減弱、血球減少、血球機能異常を認める疾患であり、造血幹細胞移植後は特に易感染性が顕著となる。今回自家末梢血幹細胞移植症例の VZV 感染症に関し解析した。[対象] 2002 年 11 月～2006 年 5 月に自家末梢血幹細胞移植を施行した多発性骨髓腫症例 41 例 (前治療歴が不明例は除外)。移植時年齢: 41-68 歳, 男/女=12/29 例, M 蛋白: IgG/A/D/BJP= 21/9/2/9 例, DS 病期 (移植時): / / =0/11/30 例, ISS: 1/2/3=23/11/7 例。[方法] 移植後の VZV 感染症の有無と病型・病期・移植前治療、移植後 3, 6, 12 ヶ月後の血算・生化学・免疫血清学的検査値との関係を解析 (t 検定, クロス表解析等)。[結果] VZV 発症+/- =13/28 例。発症例には ACV 予防内服が移植後 30 日未満であった症例が有意に多かった ($P < 0.01$)。BJP 陽性の症例で有意に発症例が多く ($P < 0.01$)、非 IgG 型症例のみの解析では移植後 3 ヶ月の時点で発症例の IgG 値が低い傾向にあった。Cr 値については移植後 3, 6, 12 ヶ月のいずれの時点においても発症例で高い傾向を認めた。[結語] 移植後の VZV 感染症の risk 因子として不完全な予防内服・BJP 陽性・液性免疫減弱・原病の病勢悪化の関与が示唆された。High-Risk 患者の層別化に基づいた、効果的な VZV 感染症の発症予防法の検討が必要と考えられた。